

資料渉猟余話

その72

「信濃時事」の記事で、少し読んでみたらから、水戸浪士の伊那谷通過と甲子祈念碑の周辺をあたっていったら、大正4年12月5日1面の市村威人「浪士が来た時（赤杵）のすぐ下の「歌之助の君へ並木梨瓶」と署名のある記事が目飛び込んできた。気になっ



『信濃時事』の奥村の投書

て、アレレと思った。ことに相違ない。

「並木梨瓶」はその変わったPNから奥村梨瓶（勘一）ではないだろうか。また中止になるという「假面」は、大正4年6月に廃刊になった明治45年孤雁吉江喬松を中心に西條八十、石井柏亭、長谷川潔らがつくった詩と評面「同人たちの計画を

黄眠先生が行く 12 奥村梨瓶の投書

嶋 不 濁

論・随想・戯曲・翻訳などの同人誌であると推測がつく。同人には日夏耿之介も名を連ねている。重ねて、奥村梨瓶は、樋口園登（日夏耿之介）の小学校時代の同級生である。とすれば、「恒之助の君」というのは、この頃使

情、そして次のように結ばれている。大正4年は、日夏耿之介の叔父龍峽樋口秀雄が政界に進出した年に当たっている一方

「耿之助さん、今は何とも云いますまい、只自あるのみとその自分を真に知って呉る人とをよく求めて止みません」

気になるのは③の「わたしも」の「も」である。梨瓶は、高等小学校を出て、飯田裁判所の給仕となり、雇となり、徴兵まで勤め、除隊となった後、飯田郵便局員となり主事として長らく務めた。「役所」は郵便局のことだろう。大正4年といえは25歳前後であるから、青年が「配偶者を」云々も領けるところだ。この「わたしも」も世間的常識的

らすればそろそろ「わたしも」の意味にも読めるが、一方で「耿之助君と同様に」わたしも」とも読める。奥村梨瓶（勘一）



日夏帰郷の同級生歓迎会 最後列の細長い顔が奥村 (昭和14年)

は、大正12年3月には大原桑村、桜井泰太郎、神藤咲之助と飯田劇談会を起し、昭和2年には池田愛泥・小菅紫水らとトカゲ座を起した。郵便局を退職後、池田愛泥・小林孤燈をたよって「南信」新聞記者となり、昭和16年信州合同新聞まで勤めた。戦後、昭和23年6月熊谷重一が「飯田の新聞」を発行